

# 『傷と後輩』

和織

5,161 文字

苗田は同じ清掃会社で働く後輩の今野を家に招待した。話してみると、その後輩は苗田が思っていたのとは全然違う人物のようだった。苗田自身へ対する想いや、その想像力や観察力にも、ドキリとさせられる。やがて今野はフローリングについての傷について、苗田を問い詰め始めた。

「そういえばお前と飲みに行ったことなかったな」

苗田が思い出したようにぼそっとそう言うと、今野も「ああ、そういえばそうでしたね」と頷いた。お互い予定もなかったのも、じゃあ行くか、ということになった。

「でもいいんですか？奥さん妊娠中なのに」

今野が言った。

「今実家に帰ってるんだよ」

「ああ、なるほど」

「なんなら家来るか？泊っていても大丈夫だし」

週末で次の日仕事も休みだったし、奢るのにもそのほうが安上がりだということで、結局苗田のマンションへ行くことになった。マンションの近くのスーパーで、苗田は慣れた感じで「あれは安いのがあそこにある」だとか、「これはちょっと高いけどこっちの方がいい」だとか言って効率的に買い物を済ませた。

「さすが苗田さんですね」

今野は感心したように言った。

「え？」

「買い物が整頓されてる。それにやっぱり結婚すると、こういう風にいろいろわかるようになるんですね。僕未だに節約とかできないし、学生の時と変わらない生活してます」

今野の言葉に、苗田はただ苦笑してみせた。

部屋に着くと、今野は真っ先にベランダの窓のところへ行って、外を眺めている。5階だから大して高い訳でもないのにと、苗田は首を傾げた。

「何してんの？」

「や、ここから帰ってくるの見えるなって」

「え？」

「この下ちょうどマンションの入り口のですよね。こっちに向かって道が真っ直ぐだから」

「・・・ああ」

「この高さなら」そう言って今野は苗田を振り返った。「旦那さんのことは認識できますね」

それから部屋を見回して、テレビの上の方に飾ってある結婚式の写真へ目を留め、近づいて手に取った。

「奥さん、かわいいですねえ。どこで知り合ったんですか？」

苗田は写真を凝視している今野から、それをひったくって元に戻した。

「教えない」

「あれ、照れてます？」

「いいから早くそれ並べなさい。腹減ったんだよ俺は」

二人はリビングのソファに座って、買ってきたものをテーブルに並べ、飲み始めた。1LDKの部屋は、玄関から廊下になっていて、その右手にトイレとバスルームがある。

廊下を隔てた場所にキッチンダイニングがあり、その奥にリビング、リビングの手前右手に、寝室へ繋がるドアがある。そういうごく普通の造りの部屋が、苗田らしいなと今野は思った。リビングにある家具はフローリングの色と合わせたシンプルなもので、センスがいいというよりはやはり、「整頓」という印象だった。

「奥さんもやっぱり綺麗好きなんですか？」

ビールを片手に今野が言った。テーブルにはおにぎりや唐揚げが並んでいる。苗田は酎ハイを飲んでいた。

「うん、そう。お互いあんまり装飾とか興味ないから、そういうのが「余計なもの」っていうカテゴリに入ってるね。ごらんの通り、引っ越しするとき楽そうだろ？この部屋」

「整理する必要ないですもんね。棚とかそのまま梱包して運べそう」

「なんか、やっぱりこういう会話になるのか、俺たち」

短く息を吐いて、苗田が言った。

「え、嫌ですか？」

「別に嫌じゃないけどさ・・・今野は、なんで掃除屋になったの？」

「それ、訊きます？」

「ああ・・・いや、でもなんか、きっかけってあったら？綺麗好きになる、さ。だってお前、ポリッシャーかけてるときいつも鼻歌歌ってない？」

「ああ、はい」

「ワックスかけてるときだってニヤけてるし」

「かけ終わった後のことを想像すると、どうしてもね」

「変態だよなあ。俺、そこまで楽しいって、そもそも楽しいって思っていないもんな、仕事だから。向いてるとは思うけど、一点集中しちゃうタイプだし」

「そうそう、苗田さんが集中してる時、すごいグッときますね」

「何それ、気持ち悪」

「この人に掃除してもらえてよかったねえ、って思います」

今野は床を撫でるような仕草をした。

「そんなこと思ってたの？」

「はい。だって僕、苗田さんみたいな人のせいで今こうなってますから」

そう言って、おにぎりをぱくりとほうばる。一口で、三分の一くらい食べてしまった。

「何？俺みたいな人のせいって」

「僕の両親が旅行好きで、子供のころから結構連れて行かれてて、それでまあいろんな国のいろんな街を目にしてまして、で、やっぱり日本で綺麗だなと思う訳ですよ。もちろん、綺麗な国もあるし、日本にだって汚れた場所はあるんですけど、結構均等に綺麗なのが日本なんじゃないかなって。それって、「綺麗に保とう」っていう気持ちの集まりだと思うんですよね。ほら、花壇を作ったら犯罪が減ったとか、といういの」

「は？」

「綺麗にしてあるから、汚されにくい訳じゃないですか」

「ああ……」

苗田は曖昧な声を出した。納得と疑心に、片側ずつ首を支えられているような気分だった。

「その場所を綺麗にした人のおかげで、そういう気持ちがあるのか、生まれてるといふか、なんか、綺麗に保とうって心が、そこに自然と集まってる訳ですよ。そういうのってすごいなと思ったんです」

今野は言い終わると、唐揚げを取って一つを丸々口へほうり込んだ。苗田は、ゆっくりと手にしていた缶をテーブルに置いた。

「……なんか、お前って、思ってたの全然違う奴なのかも」

「そうですか？僕は、苗田さんのこと、すごいなって思ってます」

「え、なんで？」

「だってやっぱり、僕が床だったら、苗田さんに磨いてもらいたいですからね。なんだろう、こう、隅々まで見逃さない感じがすごいなって。無心の境地ですね」

「無心？」

「僕はまだちょっと、邪念が払いきれないっていうか」

「……そう」

苗田は適当に相槌を打った。今野という男が、思っていたのから遠ざかり過ぎて、よくわからなくなってしまった。

「あの、僕も質問していいですか？」

「うん、どうぞどうぞ」

「あの傷、どうしたんですか？」

今野の視線は、ソファの前にあるテーブルと、その奥にあるテレビ台の間の左寄りへ落とされていた。

「……傷？ああ、あれね」

とぼけたようにそう言う苗田の目は、明らかに泳いでいた。

「どうしたんですか？」

「よくあんなの気づいたね」

「気づきますよそりゃ。それに苗田さん、自分でチラチラ見てましたもん。無意識だとしたら職業病ですね」

「そう、か」

「何かあったんですか？」

「え、なんで？」

「完全に不自然ですよ、苗田さんがフローリングの傷をほおっておくなんて」

今野は二本目のビールを開けて、真っすぐに苗田を見た。さあ、観念して話しなさい、という顔だ。苗田は諦めたように首を振った。

「奥さんと喧嘩中なんだよ」

「…どうして？」

「特別、何かあった訳じゃないんだよ。俺が一人で取り残されてたっていうか、停滞してたんだよね。それだけ。美穂、奥さんね、きっとさ、妊娠していろいろ変わって、女の人にはさ、そうじゃん？情緒不安定になったりさ、当然の変化としてあるじゃん？ホルモンバランスの崩れ、とか、わかったつもりでいたんだけどさ、俺は旦那としてはあんまりよくできてないタイプな訳。だからつもりはつもりでさ、説明受けたら義務は終わったみたいに思ってたんだ。美穂に起こってる変化を感じてはいたんだけど、どっか、自分と切り離して考えて…でまあ、もう、何がきっかけだったのかも覚えてないけどさ、怒らせて、そしたら美穂が」苗田は、先ほど今野が見ていた結婚式の写真が入った写真立てを指さした。「あれをさ、投げたんだ。ケンかもしたことなかったし、そんな風に怒ったの見たことなかったから、びっくりしてさ。でも、なんでそんなに怒るのかわからなくて…そのとき俺、まずなんて言ったと思う？」

「床に傷がついたじゃないか」

「正解」

「で、出で行っちゃったんですね、奥さん」

「もう三週間になるかなあ。さっきさ、俺が買い物上手いだとか、お前言ったじゃん？でもさ、あれ、美穂がいなくなってから、それまで家にあったものが、どこで売ってるのかって、探した結果なんだよね。あいつがさ、スーパーでいろいろ、俺の好みとかちゃんと考えて、節約してくれてた訳。それがわかってから、それに倣って買い物できるようになったってだけ」

「連絡、とってないんですか？」

「体のことが心配だから、いちよう、美穂のお母さんとはメールしてる。そのうち帰るだろうから、そんなに心配するなって言ってくれてるけど」

「お義母さんがそう言ってるなら、大丈夫でしょ」

「でも当の本人からは何にも返答なし」

「…あのお、床の傷を消さないのは、どうしてですか？」

「なんか、禊っていうか、戒めのつもりだと思ってたんだけど…美穂がちゃんと帰ってくるまで、あれを見ながら反省しよう、っていう。けどさ、お前の話聞いてて思ったわ。あれが結局、自分勝手な甘えの象徴なのかも」

「傷つけたまま、いつまでもほおっておかないだろう、っていう？」

「…もうちょっと、気使えない？」

「使うとこじゃないでしょう。言われるべきことは誰からでも言われるべきです」

「そんなかわいくなかったっけ？お前」

苗田は思わず顔を歪めた。しかし、今野が言うことは正しいのだろうと思う。かわいげはないが、彼なりに自分を想ってくれているのは、わかる。そういう風に考えられるよう

になったのは、結局のところ妻のおかだ。美穂はきっと、自分が彼女を見ている分よりずっと多く、自分を見てくれている。だから自分より気づくことがたくさんあって、でもだからといって、同じ分を求めている訳ではない。そういうことではない。大きさや分量が大事な訳ではないのだ。

「見てたのかなあ、窓から」

「え？」

「さっきお前、見えるって言ってただろ？」

苗田はベランダの窓を見た。

「ああ・・・」

二人とも、遠くにあるものへ向けるような目でベランダの窓を見た。苗田は、自分がマンションへ向かって歩いているところを、妻がその窓越しに見ているのを想像した。そんな、ドラマとかCMみたいなことを妻がやっているとは思えないけど、でも、そういう自分の知らない時間がいくつもいくつもあるのかもしれないと、そう想像した。

「妊娠した女のことなんか、俺みたいに特に頭がいい訳でもない男にわかる訳ないんだよ。でもそんなこと、美穂は最初からわかってて、別にそれが悪いとも思ってなかった。ただ、俺が一度も「わかろうとしなかった」ことが問題なんだ」

今野は手にしていたビールをテーブルに置くと、苗田を見て微笑んだ。

「それがわかるのに、三週間もかかったんですか？」

表情とは反対に、それまで苗田が耳にした中で一番冷たい声が出た。

「・・・え」

「苗田さん、仕事してるときは素敵なんですけどね」

「・・・」

「女心は僕の方がわかると思いますよ」

「はあ」

「同じことを繰り返さないために、今回の件を振り返ってみましょう」

「え」

「苗田さんみたいな人は、ここできっちり学んでおかないと、また同じことを繰り返しますよ。人間関係においても、ちゃんと整頓の仕方を理解しておきましょう」

それから、今野による説教に限りなく近い講義が始まった。まず、苗田は人の気持ちに対する考えや理解が足りないのだということを言われた。そんなのは大体の男がそうじゃないか？と苗田が言い返すと、だから人はよくくだらない喧嘩をするのだと簡単に言葉を跳ね返された。自分たちがよくあるくだらない喧嘩をしているのだと、苗田はそのとき初めて知った。

アルコールのせいなのか、今野はものすごくサディスティックで、今までに感じたことのない種類の感情を味わった苗田は、やがて気絶するように眠ってしまった。

目が覚めたとき、苗田は久々に「ああ、よく寝たな」と思った。最近は妻のことで悩んでいて、酒を飲んでも眠りが浅く、夜中に起きてしまうことがしばしばだったが、今はすごく「休んだ」という実感があった。しかし寝返りを打つと、布団と一緒に体が床に落ちた。ソファで寝ていたからだ。

「あ、今野」

そう言って部屋を見回したが、彼の姿はなかった。ソファで眠ってしまった苗田に布団をかけて、テーブルを綺麗に片づけて、帰っていったようだ。

苗田はふと、ソファテーブルの上にあるメモに目を留めた。

『キズ消しとカラーワックス使わせてもらいました。残りの掃除、しっかりやってください』

苗田は妻が付けた傷がある場所へ目を向けた。そこに近づいた。床は、綺麗になっていた。

「余計なお世話だ馬鹿」

メモを丁寧に畳んでからゴミ箱に捨てる時、苗田はすぐに支度をして、妻の実家へ向かった。妻に会うと、彼は真摯に謝って、これからもずっと一緒にいてほしいと頼んだ。すると、妻は呆れたように目を見開いた。

「喧嘩したくらいで別れる訳ないでしょう？ 迎えに来るまで帰らないって決めてただけ。この子の父親、ちゃんとやってもらおうから」

腹に手を当てながらあっけらかんとそう言った彼女に、心底ほっとした苗田だった。